

Title	うちなる環境：レンネル島民の儀礼的適応
Sub Title	RITUALS on the cultural adaptation process in RENNELL Island
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1985
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.55, No.1 (1985. 8) ,p.53- 78
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19850800-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うちなる環境

——レンネル島民の儀礼的適応——

近 森 正

——むかし、マウティキティキは二人の弟といっしょに漁にでかけた。夜明けちかくなつてから、それまで舟底で寝そべっていたマウティキティキが釣糸をたれると、何やら重いものが針にかかった。それはレンネルの島だった。島がやっと水面までひきあげられた時、あまりの重さに糸が切れ、はねあがった針は天空にひっかかってしまった。それが夜空にひろがるサンリ座の彎曲である。海面にひきあげることができなかった島の東半分は、いまでも水に浸っている。それがテンガノ湖だ——

島の人々は豊かな説話、伝承に包まれ、多彩な超自然的な世界の中で生きてきた。彼らは島の環境を独自の認識のしかたで分類し、生存のために欠くことのできない知識と思考形式をととのえてきた。そのようにして認識された環境は、けして眼に見える自然ばかりではない。人々はものとしての自然をこえた存在を含めて、それらとともに生きてきた。彼らの超自然観は秩序だった世界の全体像を構成

し、儀礼やタブーを通して、社会活動のシステムと密接に関連していたのである。この世界をとりまく、無数の超自然的存在はどこに住み、何時どこに出現するのか。まず、その分布図を描くことから始めよう。

I 超自然的存在の分布図

a. 文化英雄・カカイ

レンネルの人々にとって、宇宙がどのようにして成立したかということは、さしたる関心事ではないらしい。ひろくポリネシアの住民がもっているような、精巧な宇宙生成の神話は、ここにはみられない。島を釣り上げたマウティキティキの性格は神ではない。いわば文化英雄カカイの一人である。時にはいたずらもし、道化者でもあるが、事物の創造者なのである。人の姿をしたカカイたちは、自然の様々な要素をつくりだした。クジラやカツオ、ヒラメのような魚、トカゲやヤシガニの足、月や星座でさえ彼らの創

造によるものである。彼らにはるか昔、どこか天空の遠い島に住んでいた存在 (pengea) であるが、もはやこの世には生存していない。マウティキティキは兄弟とともに大きなシャコ貝に飲み込まれて死んでしまい、オリオン座の三つ星 (Tongungamaui) になってしまったのである。

それは別の伝承でも同様である。——世界のはじめ、あたりは真暗だった。マウティキティキが日の光と月、あらゆる種類の魚を創造した。そして釣糸でレンネルの島を海面までつりあげ、彼の父親アタンガンガが植物で島をおおった。アタンガンガは島にひとつの洞窟をみつけた。けれども彼はそれを息子に教えなかった。そこで二人はけんかになった。マウティキティキはそのあらそいで死んでしまった。アタンガンガは自分のしたことを悔んで、息子に再び命を与えてやった。しかし、マウティキティキは大層、憤慨して、島を上下にゆさぶった。その時、彼の父親は海に落ちて溺れて死んでしまった。そして、マウティキティキは空に登って星になってしまった。——

文化英雄カカイたちは、神とは違って靈的な力はない。何故なら、もはや死んでしまったのだからと島民は説明する。

マウティキティキが彼の尿と精液でココヤシの実をつくったという伝承がある。それによって、ココヤシの実が儀

礼をおこなうときにいかに大切なものであるかを教えているが、そのことが儀礼にとりあげられているわけではない。また特定の社会集団とのかわりもないようである。カカイの伝承はその多くが説明的なもので、ある場合には道徳規範を伝えたものがあって、いわば教育的要素も少ない。それはポリネシアの伝説にあらわれる文化英雄の一般的性格をよくもっているといえるだろう。

カカイたちの活動空間は天空のどこか一角、あるいはレンネルの島である。しかし島の具体的な場所とのかかわりはほとんどない。島全体が漠然ととらえられているにすぎない。しかし、彼らはもはやこの世にはいない。途方もない昔、人々のために日の光や月、そして島を与えてくれた存在である。それは尊敬すべき対象ではあっても、畏怖されるものではないのである。

b. 先住民・ヒティ

今から二三世代か三四世代の昔、住民の祖先カイトウたちが、はるばる東方の海を渡ってレンネルに上陸した時、そこにはヒティという先住民が住んでいた。ヒティは背が低く、腰まで達する長い毛髪をもち、膚は黒く、ちょうどコウモリの羽のような毛でおおわれていたという。島に到来した祖先たちとヒティとの関係は、はじめ平和的であった。ヒティはさまざまな生活技術をカイトウたちに教えた

という。

ところが、ある時カイトゥのおじのトゴが捕えたハトのことでヒティといさかきをおこし、殺されてしまった。カイトゥは報復を企て、ヒティとの間に長い戦いをはじめた。そしてついに、島のヒティを皆殺しにしてしまったという。しかし、ヒティはキリスト教が導入されるまで、森の中の洞穴にかくれ住んでいて、島の人々は狩りや魚とりにでかけるときに、よくヒティに遭遇したということである。森の中に住んでいたヒティは時折、不思議な音を発したり、影や光を投げかけることがあったが、多くの場合、危害を加えることはなかったという。

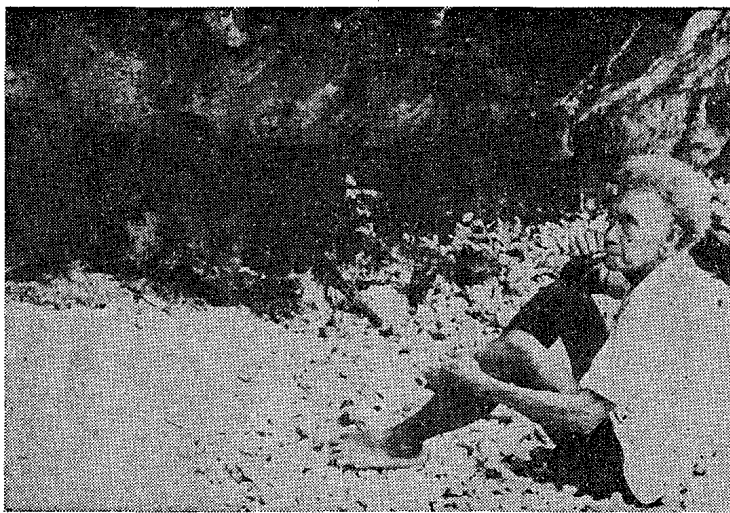
ところで、今日住民たちの生活技術の中には、ヒティから学んだと伝えるものが数多くある。かがり火をたいてトビウオをとる漁法、大きな木製の釣針をつくって、サメを捕獲する方法、カンラン科の高木ゲムギの実の果肉から油を抽出する方法、毒性の強いタシロイモの毒抜き法、ヤマノイモ科の野生植物の蔓や茎の食べ方、パンダナスの実を食べること、ヤシの木に登る時、植物のツルを足に巻きつける方法などはみなヒティから学んだものであるという。

島のさまざまな地形もヒティに由来するものが多い。島の中で肥沃な土壌と、そうでない土壌がかたよって分布していること、島の南側にラグーンの発達しないこと、また

うちなる環境

丘陵の一方の崖が海に落ち込んでいて、他方がオーバーハングになっている地形は、ヒティがカイトゥと戦った時にけずり落されたものであるといった説明もそのひとつである。

このようにヒティの行為は何ほどか文化英雄カカイの性格に似たところがある。ただ、カカイの創造的行為が、島民の宇宙観にかかわり、一層、象徴的であるのに比べて、ヒティの行動は島の中に限られていて、いわば島民の生活



Pl.1. ヒティの石と霊媒だったベニ・ピア

技術に密着している。ヒティの伝承には、民族科学的な説明が多いことが、キリスト教化した今日でも、なお語りつがれている理由であるかもしれない。(近森、一九八二a)。

ヒティが超自然的な能力をもっていると考えられるのもカカイとは違った

点である。ラバングのベニ・ピア老人に案内してもらったカンガヴァ湾の海岸にある大きな石は夜間、漁に出たヒティの夫婦が夜明けとともに石になってしまったものであるというが、その石は漁の多寡を左右する力をもっているという。(p.11)

今日でも漁にでかけるときには、そのことを他人に告げてはならないという習慣がよく守られている。私達も島に滞在中、突然、漁に誘われて大慌てをしたものである。もし、あらかじめ計画を人にしゃべると、ヒティはそれを聞きつけて海の魚や森のコウモリをかくしてしまうのだという。だから人々は丘陵の森を越えて海に出るとき、皆ひたすらにおし黙って歩く。ヒティが化したという石の前にさしかかった時には、小枝を折って石を叩きながら呪文をとなえる。「眼を閉じよ、眼を閉じよ。お前の好きな煙草をやるから。」人々は火起しの棒と煙草をささげヒティが眠っている間に、あるいは一生けんめい火を起しているすきに、漁に出なければならぬ。そうしなければ、獲物がかくされてしまうのだというのである。

さて、先住民としてのヒティは実在したのだろうか。S. Elbert (1962) は、レンネルの言語にみられる /gh/ と /l/ の音素がポリネシア語のどこにもみられないこと、またメラネシアの地域との接触がきわめて限られていることによ

って、それらがヒティの遺産ではないかとしている。しかし私たちの考古学的調査は、まだそうした先住民の証拠を見出していない。(近森一九八二b)

島民にとってヒティの存在を意識することは二つの点で重要な意味をもっている。第一はヒティの存在が人間のレベルにおいてカイトゥウにはじまる「われわれ」の集団を自己規定させていることであり、第二は島民の環境の理解の中に、時間的な認識を与えていることである。島民の歴史意識は神観念の中にはあらわれない。神はむしろ歴史を超越した存在であったからである。歴史をつくりあげたのは、島を海中から釣り上げたマウティキティキであり、さまざまな文化英雄たちとヒティであった。

——カカイの時代が終って、島はヒティが住むところとなった。ある時東方の海の彼方からカイトゥウたちがやってきて、われわれの祖先になった。そして四つのカカイアンガ(サブ・クラン)が島を四つに分けた。そして二三世代か二四世代を経過したのが今日である。——島民の歴史はヒティを介して、超自然的な世界から現実の世界につながっているのである。

c. 神々・アトウア

今日、島民はキリストに対する恐ろしいもの、荒々しいもの、野性的なものなどすべてにアトウア *atua* の表現を用

いる。しかしキリスト教が定着する一九三八年以前には、アトゥアはもっと限定的に神々を指すことばであった。

レンネルの神々は偉大な存在である。神のもつ超自然的な力 ('ao 'atua) は非日常的な力である。雷鳴や稲妻、暴風をひきおこす力、祭祀場の神聖さを表す力、人や動物に生命を与え、また奪う力はすべて神のものである。

最も基本的には、神々は「祀る神」 'atua ngina と「祀らない神」 'atua he'ngina あるいは 'apai に区別される。それは善神と悪神といった区別とはちがう。祀る神は儀礼を通して人間が神の行動がある程度コントロールできる。そして、その機会に人間の社会的領域と共通の場をもつことができる。

これに対して、祀らない神は人に危害を与える時にだけ出現し、これをなだめる手だてではない。人間の社会的秩序が全くとおよばない神々である。ただ祀らない神は祀る神より力が弱いので、祀る神によってその力をしずめることはできる。しかし、祀る神でさえ、正しい方法で儀礼をおこなない丁重に供物を奉げなければ、やはり人に危害をおよぼすことにかわりはない。嫉妬、うらみ、復讐などは、神の行動の中にもあらわれる。島を襲うサイクロン、作物を破壊する早魃や虫害、海上での災難、集団の間の争い、病気や死など、人々の生活はさまざまの危険にとりかこまれて

うちなる環境

いる。人々はそれらのすべてにかかわる神々の行為をいちはやく察知しなければならぬのである。

祀る神には、さらに天の神アトゥアガンギ 'atua ngangi と地域の神ガスエンガ ngasuenga の二つのカテゴリーがある。その由来はこうである。

——今から二四世代の昔、カイトゥは一族の集団とともに母なる島、ウベアガンゴを旅立った。その時、彼らは男女の二柱の神、グアトゥプアとテポウトゥインガンギの化身である二つの石をカヌーにのせた。しかし、長い航海の途中、高波にあって、その聖なる石のひとつ、テポウトゥインガンギが海中に沈んでしまった。そこで、ヘヌアタイの島についた時、彼らは失なった石のかわりに、そこでみつけた新しい石ととりかえた。危険の多い航海のあと、レンネル島に到来した人々は、天の神 'atua ngangi に対して、地域の神 ngasuenga を祀ることになった。——

——天の神の最高神テハインガアトゥア Tehainga 'atua は、養孫にあたるテハインガベガ神 Tehu'aigabega にむかってこう言った。「この島はわしのものじゃ」テハインガベガ神は答えた。「でも、島の人々は私のものです。」—— (Elbert, S. et al. 1965)

これらの伝承はさまざまな形式をとって、今なお人々の間に記憶されている。これは天の神が宇宙・自然とその現

五七 (五七)



fig. 1. 天の神テハインガアトゥア
(島の子供が描いた絵)

象にかかわり、すべての島民に崇拜されるのに対し、テハインガベガ神をはじめとする地域神が、社会や人々の活動、人と人との関係にかかわり、おもにサブ・クラン(カカイアシガ kakaianga) やリネージ (ハノハノ hanohano) によって祀られることを説明する。このような祀る神にみられる二元性は島民の世界観とりわけ、社会過程に関連して重要である。

天の神にはテハインガアトゥアのほかに、その妹のシキギモエモエ Sikingimomoe、バベンガ Baabenga、テアンガイタク Teangaitaku、テハイネアンギキ Tehaine'ar-

ngiki、テポウトウインガンギ Tepoutu'uingangi など多くの神があげられるが、それらのうちで最も神聖とされているのが、テハインガアトゥア神なのである。

テハインガアトゥア神は宇宙を組織する力をもつ。すべての自然物に生を与えるとともに死も与える。すべての生きものはひとしく生命 *ma'ungu* をもっているが、これを支配するのがテハインガアトゥアなのである。そのはかりしれない強い力は、したがって特定の社会集団に属するものではなく、島のすべての人々に普遍的にかかわってくるのである。

これに対して地域の神は、人間の社会とその組織、人の文化的社会的活動にかかわり、その社会の守護神として機能する。したがって小氏族(カカイアング)や父系系譜によって祀られる神々にちがいがあるのはそのためである。伊藤(一九七八)によれば、テハインガベガ神は四つのカカイアングで、共通して祀られているが、他の神には次のような出入りがある。

(カカイアング) (地域神の名)

ムギヘヌア——トウプイマタンギ、その他

カナバ——トウハイテアガバ、その他

ルグ——マサファイテカバ、その他

テンガノ——ファイテマウンギ、トウマウンギ、ト

これらの地域神は天の神に比べて神聖の度合が低いが、それぞれの社会の象徴的性情をもち社会の存続に保証を与え、住民を保護する。動物や農作物に生命を与え、生育をうながすのは天の神の力によるが、それをその社会にもたらすのは地域神の力によるものだと言われている。

神々の世界はどこにあるのだろうか。人々は水平線の上に広がるはるか空のアーチの外側に神の世界があると説く。最高神テハインガアトゥアの居所は東南の天空マヌカトゥウ *manukatu'u* にあるという。伝承によれば、そこはヤム、ココヤシ、魚などすべてのものが豊かにあるところである。東南の方向は四月から十一月まで安定した貿易風が吹いてくる方向であり、創始祖先カイトゥが到来した方向にもあたるのである。

地域神テハインガベガの居所も、同じ東南の天空にあ



fig. 2. 地域神テハインガベガ (島の子供が描いた絵)

うちなる環境

り、そこはヌクアヘア *nukuahaea* と呼ばれている。天の神の方がより聖であるので、マヌカトゥウの方がヌクアヘアよりも遠い天空に位置するのだという。テハインガベガのすまいは島の住民の家屋敷 (マナハ *manaha*) の形によく似ている。(近森一九七五、一九七九、一九八四) そこには大きな聖屋 (テハゲタプ *Te hange tapu*) が建っている、その中には二段の棚がある。タロ、ヤム、バナナなどの食物のほか魚、樹皮布、マット、ウコン、ココヤシ、ベテルヤシなどあらゆるものが一杯つまっている。神はそこから人々にそれらの品物を送り届けてくれるのである。

卓越風の方向が神の世界として認識されているのかもしれない。地域神のひとりエケイテファ神の居所ムンギガン *gimungisangi* は十二月から三月にかけて吹く卓越風の風向、北西の天空にあり、トゥパイマタンギ神のすまいも北西の天空ヌクギギ *nukugigi* にある。神の世界としてあきらかに東南方向と北西方向が重視されているように思われるが、それはまた細長い島の軸の方向でもある。

祀らない神 *apai* のすまいはかならずしも一定していない。たとえば悪い神を畑から追い出すには、祀る神あるいは祖先に祈願して、南に立ちのくようにさせる。島は北面に面していて、南側は祀らない神のいる汚れた場所であると考えられているからである。

神の姿は目にはみえない。神の姿を彫像などに表すこともない。儀礼の際にテハインガアトゥアは一本の杖マウンギテヘヌアに表現され、テハインガベガは槍に象徴されるだけである。神をみることができるのはトランス状態になった霊媒 *taunga* だけである。ラバング村に住む霊媒の人ベニ・プイアによれば、アトゥア（神）は太い樹皮布の下帯をしめ、腕輪や耳飾りをつけ、正装をした時の人間の姿をしているという。神の振るまいは人間と似たところがあって、飲み食いをし、妻をめとり、子供をもうける。憎しみ、愛し、善をおこなうこともあれば、悪事をはたらくこともある。

日常生活で突然、神に遭遇することはきわめて危険なことである。夜中に黒いトキの鳴き声を聞くと人はテハインガアトゥア神が近くに現われたことを感知し、さとられないうように沈黙をまもらなければならない。神はしばしば鳥や動物の姿に身を変じて出現する。テハインガアトゥアはトキのほか、軍艦鳥やホタル、サメなどの姿であらわれる。グアトゥプア神はサンショウクイ、恐しい女神シキギモエモエは村の中ではホタル、海ではサメやアカエイの姿であらわれる。またバベング神は時折、白いカワセミの姿に変ずる。私は島に滞在中、夜道をいそいでいた時にホタルをみかけた。その時、同行していた島の男が、押し殺し

た声で「あれはアトゥア（神）だ。」といったのを今でも忘れることができない。

また、魚をバナナの葉で包み、料理の準備をしている時に神が何か動物の姿をして不意に飛び出してくることもある。そのような時、人は神の異常な行動をすぐさま理解しなければならぬのである。

ときには神が人の姿で現われることもある。伊藤がティゴアのテモシアス・ガトンガから聞いた伝承には次のようなものがある。（伊藤一九七八）

ある日、男の姿に身を変えた天の神テハインガアトゥアが、シナの夫を漁にさそった。しばらくすると留守番をしていたシナのところにその男が戻ってきて、夫の下帯をゆずってくれないかとせがんだ。シナはこのいきさつを察知した。彼女はすぐに炉端の灰を掻きわけて穴を掘った。その穴を降りると地下世界ポウンギに通じる暗い道があった。途中、ネズミの案内を得てその道を必死でたどり、やっとのことで夫を見つけ出すことができた。シナは夫を抱きかかえるようにして死者の世界ポウンギから逃げ出し、夫を蘇生させることができた。——これはテハインガアトゥア神が人に化身したことを伝えるとともに、死者の世界が炉の穴を通して到達することのできる暗い地下世界であることを物語っている。

神々は天空の一角に居所をさだめ、そこにすまっている。そして儀礼に際して、島に設けられた祭祀場ガゲンガ、あるいは首長の屋敷の儀礼広場ゴトマガエに來臨する。しかし、余期せぬときの出現は、きわめて危険である。儀礼を通して招請する時以外の神との出会いが、いかに恐しいものであるかを語る伝承は非常に多い。

d. 祖霊・アタ

レンネルの人々は、死後どこへ行くと考えているのか。他界はどこにあるのか。ここでは伊藤の調査結果を紹介することにしたい。(伊藤一九七八)

人の死は神を適切に祀らなかったり、その手はずを誤ったりした時、あるいは神の怒りや妬み、不快をかうようなことがあった時にならずやってくる。神の気まぐれもまたその原因となる。死とは神にマウンギ *maungi* を奪われるか、隠されてしまうことである。それは靈魂あるいは生命とでもいえるもので、あらゆる生物はそれをもっており、活動の源泉である。人の場合は頭の中にあるのだという。伊藤はティゴア部落の首長、ガトンガ氏から聞いた「妻の生命を神に奪われた男の話」をとりあげている。

——夫の留守中、妻のもとに夫に身を変えたテハインガアトゥア神があらわれ、外に連れ出し、彼女のマウンギを奪ってしまう。夫が神の祭祀に用いる敷物で妻の亡骸を包ん

うちなる環境

だったので、神のおそろしい怒りにふれ、空に激しい稲妻が走った——

もし神にマウンギを奪われたとしても、それを首尾よくとり戻すことができれば、蘇生する可能性がある。さきにあげたシナの話はそれを物語る。

神に奪れたマウンギはどこへ行くのか。シナの伝承は、死者の世界が炊舎の炉の灰の下を通過して達することのできる地下の国ポウンギ *Poojunggi* にあることを物語る。そこは暗い所で、ムカデやトカゲなどのすみかでもある。地下世界への人口は、炉の灰の下にあるだけではなく、住居の基壇の下にもある。それは石灰入れの容器の口か、ヤシガニの穴のようで、そこにかかっている梯子をおりるともう真暗な世界に通じるのである。シナが夫を追っていった道は、この通路である。途中にはいくつもの岐れ道があつて、熱い道は神の道で、涼しい道が人の道であるという。

ポウンギに至る道は海上からも通じている。死者の靈魂マウンギは島の東南岸にあるラバングの浜に集まり、そこで踊りをおどり、カヌーに乗って旅立つのである。その方向は創始祖先カイトゥウがやってきたと同じ、東の方角にあつたという。

死者の世界ポウンギにはアングキ *angiki* の水という聖なる湖がある。そこに到達した靈魂マウンギは、そこで水

浴をして祖霊アタ^{ata}になることができる。アタになったものは、もはや人間の体内に戻ることはできない。祖霊アタは、ここからテハインガアトゥア神や、テハインカベガ神のすまう神の国を訪門することになる。そのとき、祖霊アタは神々への贈物として樹皮布のマットやコウモリの齒でつくった首飾りを携えていかなければならない。葬儀の時に大切な副葬品としてそれらを墓(タコトンガ *takoto-haga*)に納めるのはそのためであると、島民は説明する。

すでにのべたように神の世界は、はるか東南の天空トゥアガンギ *tu'aa'ngangi* にある。そこは光に満ちあふれ、タロ、ヤム、バナナ、魚などがなんでも豊富にあるところである。子供の生命マウンギもそこにあるという。伊藤はそこを日本古代の「とこよ」あるいは沖繩のニライカナイと比べて共通性を指摘している。(伊藤一九七八)

祖霊アタに転化できるのは墓に葬られた祀られる祖先(サアマトウア *samatua*)にかぎられる。神に受け入れられることになった祖霊アタは、人間の求めに応じて神と人の世界を往来する人々の祈願を神に伝え、健康や幸福、あらゆる富や財を子孫たちに送りとどける。祖霊が神の意志と人間の願いを仲介するメッセンジャーとして重要な役割をもつのである。

祖霊は天空の神の世界から、中空テガンギ *te'ngangi* を

通って島に降りてくる。その道はもはや靈魂マウンギのたどる暗い地下道ではない。伊藤(一九七八)は天空の道を「来臨が意識される神霊のミチ」、地下の道を「往きが意識される死者のミチ」と形容している。こうしてみると祖霊の認識は、実に明確に神と人との空間的關係を位置づけるのである。

e. 限定的な超自然の世界

レンネルの人々の超自然的世界は空間的にも、時間的にもただ無限にひろがっていると考えるのは適當でない。むしろ一定の限られたシステムの中にさまざまな超自然的存在が組み込まれているとみるべきだろう。

この世界を創造した文化英雄カカイと、あとからこの島に住むようになったヒティたち、そして二十数世代の昔、東方から海を越えて到来した創始祖先カイトウたち——そこにはそれぞれ限りのある時間が直線上に継起していて、人々に島の進化と歴史を与えている。天文学的年代と考古学的年代そして歴史学的年代という、それぞれ質を異にした時間観念が明確な形で示めされているのである。

これに対して神々は時間を超越している。系譜的世代意識の強い島民の考えを反映して、神々にも親族關係はある。例えばシキギモエモエ神はテハインガアトゥア神の実妹であり、エケイテファ神とテウウヒ神は実弟である。ま

たテハインガベガ神は養孫である。しかし、神々の系譜関係は世代を数えて時間的深さを知ることが出来るものではない。神の生命は永遠だからである。ところが神々と交渉をもつ祖霊アタは、人々の祖先であるから、系譜世代的な時間をもっている。彼らの墓は屋敷の中にあつて、固有名詞で伝えられている。時間の経過は容赦なく、祖霊にも老いを与える。したがって祖霊は神とのかかわりで時折、若返えりをはからなければならぬ。テハインガベガ神は老化した祖霊の頭をつかみ、指と趾の先端を引張って、老化した皮膚を脱がせてやるのである。そうすると祖霊はいつまでも若く、生きつづける。限りのある時間と限りのない時間の関係は、こうして調整されているのである。

空間的にみれば、レンネルの人々の他界は地下を通つても、また海上を通つても達することのできる暗黒の世界である。この二つの道がどのような違いをもつのかははっきりしない。ただ、島の真下ではなく、はるか東方に地下世界があると認識されているから、その二つの道は同じ目的地に到達すると考えられるのである。

祖霊はそこから天空の神の世界を志向する。その方位が卓越風の方向と一致していることは注意してよい。そして神の世界から神々や祖霊が島に到来するには天空から、中空をへて降りてくる。したがって、この超自然の通路は円

うちなる環境

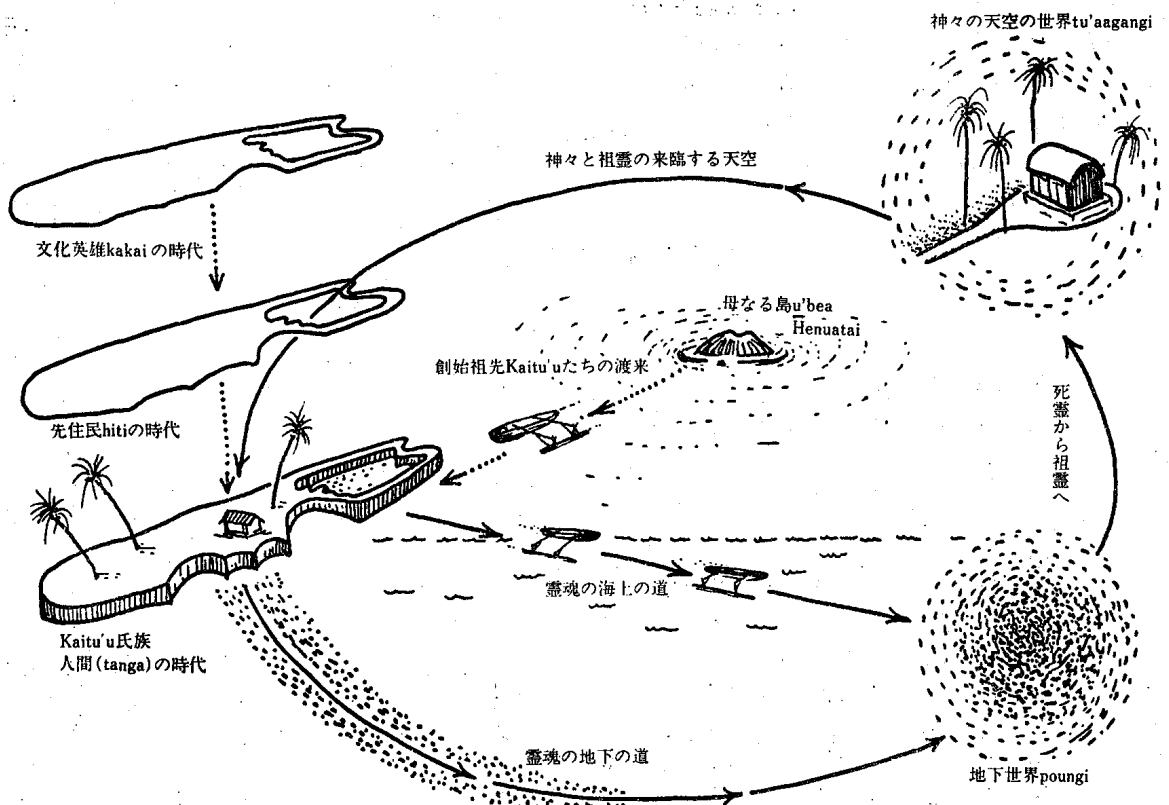


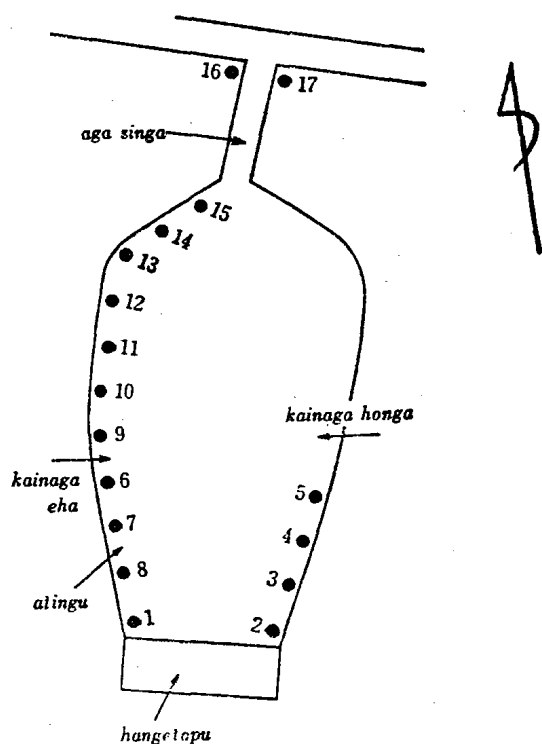
fig 3. 時間的・超時間的な宇宙観の理解

環を形づくっているといえるだろう。(伊藤一九七八)限られた時間と空間が、そこに完結性を与えているのである。(fig.3)

II ふたつの儀礼

——イナテイとアンガトヌ——

予期しない時の神と人との出会いには、かならず災難がつきまとう。生活の安寧を得、食物を確保するために人は神々と契約を結ばなければならない。人間の社会生活に保障を得るために、祀られる神との間にコミュニケーション



神々 'atua の名称

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 Tehaing'a'atua | 10 Ghibaumoana |
| 2 Tehakigangi | 11 Takiagohanga |
| 3 Teagaitaku | 12 Temaguhekea |
| 4 Tausokohia | 13 Guatunihenua |
| 5 Niulokua | 14 Tunkiteika |
| 6 Siki gimoemoe | 15 Ndaitekaba |
| 7 Saengeiteba | 16 Tepoutu'ui gangi |
| 8 Tehuaingabega | 17 Gaueteaki |
| 9 Temagotonisia | |

fig.4. ガグエンガ(祭祀場)における神々の席 (瀬良 1979)

を確立するのが儀礼なのである。儀礼は合法的な手続きをへて、一定の時間、人が何の危険もなく聖なる領域に入り、神とかかわることのできる唯一の手段なのである。

すでに述べたように、神々の性格について、島民の間には共通した観念があるから、儀礼においても、それぞれの神に対してなすべき仕方がちがってくる。儀礼は天の神テハインガアトウアと地域神テハインガベガの二柱の神の周辺に集中しているが、この二元性がレンネルの宗教文化を特徴づけている。

天の神の儀礼をおこなう場所は、共同体の祭祀場ガグエンガである。ガグエンガの形態は、テハインガアトウア神の天空の居所、マヌカトウを地上に再現したものとされている。平面のプランは羽子板の形をしている。南側に通路や祭儀広場が設けられ、聖なる社は北に面するようにつくられる。神々は遠い東南の天空から降りてきて、祭祀場の西側に東面して坐るのだという。(fig.4)

島内のガグエンガはすべて系

譜的なつながりをもって、テンガノ湖の岸にあるマガマウベア *Magama'ubea* から分岐したものである。マガマウベアは、島民の創始祖先カイトゥが建設したものとされ、もともと神聖な祭祀場である。(われわれの考古学的調査結果では、その年代は少くとも六四〇年前にさかのぼる。)(近森一九八四)その後、四つの小氏族サブ・クラン(カカイアンガ)が形成されると、それぞれの中心地に祭祀場が分岐し、さらに集団の分裂がそれらを分散させることになった。(近森一九八五)

これに対して地域神の儀礼は、リネージのレベルの首長あるいは家父長(ハカフア *Hakahu*)の家屋敷(マナハ *manaha*)でおこなわれる。マナハの形も基本的にはガグエンガと同じである。これはテハインガベガ神の天空の居所ヌクアヘアを象徴したものであるという。ヤシの木に囲まれたゴトマガエ *ngotomagae* と呼ばれる広場が地域神の来臨する聖なる空間である。

祭祀場が開かれたとき、首長の家が建てられたとき、カヌーが建造されたとき、ヤムイモが収穫されたときなど、儀礼はさまざまな機会をとらえておこなわれる。キリスト教化した今日、それらは全く失なわれてしまい、詳細を知ることが、もはや老人の記憶によるしか手だてがない。ただ、あらゆる儀礼に共通していることは、そのたびに神に

捧げるための食物が集積されなければならないということである。

それは神の供物と考えられていただけではなく、神からの贈物トヌ *tonu* であり、ある場合にはそれ自体、神の具現(化身)ともみなされていたのである。例えば、二月頃、大群で寄せてきたニザダイの一種ポンゴ *pongo* (*Acanthurus maculiceps*) は、テハインガアトゥア神からの贈物と考えられて、ポンゴとは呼ばずに「汝の海への訪問者」(*an-gasiga-tou-tai*)と尊称する。また、八月の終りか九月の始め、東寄りの貿易風が吹きはじめるころ温い海水に乗って島に接近してきたトビウオ *sasabe* は、テハインガベガ神の贈物とみなされて「全き海」(*tai-kotoa*)と呼ばれる。日常の名がタブーであるというのではない。神に対して礼を失すからであると説明される。

サメ *mangoo* は、とりわけ神聖なものである。サメは「汝の岸への来訪者」(*Agasinga-tou-akau*)の尊称をもち、テハインガアトゥア神をはじめ、バベンガ、シキギモエモエなど天の神の化身と考えられているからである。

その他にカツオやマグロは、エケイテファ神からの贈物であり、クジラ、イルカ、アオウミガメ、イトヒキアジなどがテハインガアトゥア神からの贈物である。ただし、クジラやイルカは島民の漁の対象ではないから、海岸に打ち



a



b



c

P1.2.

1975年8月 40年ぶりに試みられたガプ（収穫儀礼）の踊り。板太鼓（パパ）を叩きながら、その周囲を男たちが回る。

上げられたものを捕獲するだけである。供物にはされないが、漂着したカヌーがテハインガベガ神からの贈物とみなされるのは、それと類似した発想であるのかもしれない。神は魚の背に乗ったり、動物の姿に身を変じて現われる。(fig.5) また、神の出現の前兆に動物が送られてきたりすると信じられていたから、人々は魚や鳥の捕獲には入念に対処しなければならなかった。トビウオやニザダイのように大量に獲れた魚、クジラやイルカのような大きなもの、カジキやカツオのようににめったにない海の幸、海の彼方から漂着したものなどはみな神からとどけられたもので



fig.5. 魚に化身したバベンガ神
(島の子供が描いた絵)

うちなる環境

あったから慎重にとりあつかわなければならなかったのである。

神は時として、人間の靈魂 *maunsi* をそれらの代償として求めることがあった。その時には、祭祀場(ガゲンガ)において伝統的なカウカウの儀礼をおこなわなければならない。ココヤシの実の殻の椀にバナナの幹からとった汁液を満し、司祭をつとめる首長 (*tunihenua*) が祭祀場の地面にたたきつけて割る。これによってテハインガアトウア神に自分の命を代償として支払ったことを象徴させたのである。

ココヤシやタロ、ヤムなどの作物もまた神の世界から送りとどけられたものである。はじめ神の領域に属していた食物は、その神聖さ (*tapu*) のゆえに、人々が口にすることができない。そこで神聖さを減じ、それを人が食べられるように、俗 (*tanga*) なるものに転化しなければならぬ。その過程が儀礼なのである。

司祭者は儀礼に際して、妻との関係をさげ、汚れた敷物に坐すこと炊舎に近づくこと、大声をだすこと、みだらな話をするをつつしみ、排便は遠い畑でおこない、他人に毛髪に触れさせないようにして、ウコンの粉で身を清める。そうした司祭者だけが神の聖なる領域に入り、神とかわることが許される。司祭者は祖先の靈にこう語りかけ

ながら祈る。「トゥイアイカオネ *tuiaika'one* (祀られる祖先に対する尊称) よ。ここに聖なる分け前が汝の肩の上にかけてられる。少しの聖 *tapu* が汝のもとにささげられるだろう。」祖霊はこれを神に伝達するのだという。これによって神聖さは神のレベルから祖霊のレベルに軽減される。司祭者は儀礼の過程で、呪文をとえながら、神聖さを少しずつ取り除いていくのである。

聖 (*tapu*) から俗 (*tanga*) への移行は、境を接して一変するものではなく、段階的なものである。タブ *tapu* は神聖さのゆえに制限をも意味している。食物に対するタブの制限は、まず司祭者に対して解かれ、儀礼が進行するにつれて、順に男子の構成員、そして女、子供へと解かれていく。こうして自然の恵みがすべての住民に享受されるようになるのである。適切で、十分な供物を神にそなえ、神々との交流に成功すれば、神は海の幸と作物のみのりを人々に約束してくれるのである。

ここで儀礼に際してささげられる供物の内容に注目したい。天の神にささげられる供物はアングトヌ *angatonu* と呼ばれ、地域神にささげられる供物はイナティ *inati* と呼ばれる。いま、両者の供物の品目を比べてみるとその間にはいささかの相違があることに気がつくのである。

アングトヌに含まれるものは、サメ *mangoo*、クジラ

hu'ai tahoga'a' イルカ *tahoga'a'* アオウシガメ *honu'* イトヒキアジ *'ungua* ニザダイ *pongo'* トビウオ *sasabe'* カソオ *bangukango* そのほかマグロ、カジキそして香り高いゲムギ *ngeemugi* の油などである。

これに対して、イナティには、サメ、トビウオ、ニザダイなどアングトヌと共通するものがある他に、ベラ *ngae'a* アジ *hu'aika'* フェダイ *hangamea'* ニザダイの別種 *pangangi* ブダイ *menga* などの日常的な岩礁魚が含まれる。そして、バナナ、ココヤシ、ヤム、タロなどの農作物が加わる。

こうして、両者の品目を比べてみると、共通するものもあるが、天の神にささげられるアングトヌには海の彼方から寄せるもの、クジラやイルカ、カジキのように大きなもの、トビウオのように群をなしてくるものなど、すべて人々にとって予期せぬものであり、神秘性をいだかせるものばかりである。それゆえ神聖さの度合も高いわけである。これに対して、地域神にささげられるイナティには、どちらかと言えば日常性が加味されている。すなわち、日常的な岩礁魚の類と確実な収穫を予想することのできるタロ、ヤム、バナナなど畑の作物が、そこに含まれている。

この二つの供物のちがいは何を意味しているのだろうか。天の神と地域神の儀礼がもつ社会的関係を考えてみな

ければならない。

一九三三年、キリスト教が導入されるちょうど五年前にレンネルを訪れたG・マクレガーは幸運にもテンガノ湖の首長タウポンギの屋敷でおこなわれた地域神テハインガベガの儀礼を実見した。その貴重な記録から、儀礼の様子を垣間見ることができぬ。(G. MacGregor 1943)

——収穫されたタロやヤムが大量に首長の屋敷(マナハ)に運び込まれ、家の前の広場(ゴトマガエ)に積み上げられる。夕陽が西に傾くころ、儀礼は半月形をした板太鼓(パ(Papa))を打ち鳴らすひびきとともに始まった。パパを打つ男が広場の中央に陣取り、そのまわりを男たちがゆっくりと声を出しながら踊りはじめる。夜がふけるとともに太鼓の音ははげしくなり、踊りの輪は一段と早くまわる。歌詞の終るたびに大きな声をはり上げて、ジャンプをくりかえす。男たちだけによってささげられる神の踊りは満月のもとで明け方まで続く。この朝明けの踊りがおこなわれている最中、首長は真新しい敷物に坐して家の中にもっている。広場(ゴトマガエ)の西側には敷物でおおわれた板太鼓がおかれ、神々と祖霊が坐る新しいマットとヤシの葉が敷かれている。踊りが終るころ、首長は板太鼓の上で長い祈禱をささげ神を屋敷に招き入れる。これにつづいて首長はテハインガベガ神の象徴である儀礼用の槍を手に持つ

うちなる環境

て、敷物の上に神を坐らせる。間もなく積み上げられたヤムの一部がうやうやしく、神にささげられる。このとき、テハインガベガ神の息子達の化身(Bakagorau)として選ばれていた数人の成人男子が一行に並び、供物の一部を口に入れるしぐさをする。こうして一連の儀式が終了すると、山積みのヤムは、首長の手によって参会していた男たち等に等しく配分される。屋敷の後方では、女達によって会食の準備がはじめられる。——

毎年四月から五月にかけて、マナハごとにおこなわれる収穫儀礼(ガプ ngapu)は地域神の儀礼の中では最も重要なものであった。神に供物がささげられたときに、人々と神との間にきずなが確保され、作物のみりと、生活の安全が与えられる。そして収穫物が儀礼の参加者に配分された時に、経済的な交換が成立し、人と人との関係が保証されるのである。(p.2)

ところで農地はリネージを構成するすべての成人男子(マトウア natua)によって、個人的に保有されているから、人々は何がしかの余剰を儀礼に際して首長におさめなければならぬ。首長はそれらのすべてを供物イナティとして集積する。むろん、最も多く供出するのは首長自身である。首長が余剰を個人的に蓄積するということはないのである。(2)(3)

レンネルの伝統的な社会において、首長（ハカファ）を他の土地保有者（マトウア）から区別する規準はかならずしも明瞭ではないが、彼はその系譜を通じて、代々継承した生産性の高い土地、いわゆる「よい土地」を多くもっている。したがって彼は儀礼を催して、他の人より多くの収穫物を配分することができるのである。しかしその他位は、ただ富の大きさによるわけではない。彼は生産物を寛大に人に分け与えなければならぬ。儀礼をたびたびおこない、収穫物をできるだけ多く配分することによって、首長の名声が高められるのである。

首長は創始祖先カイトゥウから分岐した父系リネージの長であり、その称号は年長原理によって長男に継承される。儀礼をとりしきり、神とかかわり、収穫物を人々に配分しなければならぬ。したがって、いかに多くの儀礼用作物を生産するかは彼の最も大きな関心事なのである。キリスト教によってこうした儀礼が廃止された今日でさえ、収穫物を気前よく人に配することは、信望を得るための大切な条件であることにはかわりはない。首長による祝宴（今日ではピジン・イングリッシュでビッグ・カイカイ）は、しばしば催されるのである。首長の孫の誕生祝い、カヌーの建造、日曜学校の開始などに私達も幾度となく招待された。それは会食というよりは、ヤシの葉でつくった籠に一



Pl.3. 首長（ハカファ）が催す祝宴

杯つめた食糧を配することに主眼がおかれていたことは明白であった。（p.13）それがリーダーのつとめなのである。

儀礼を通じておこなわれる首長の経済的な管理者としての役割は、どの範囲に及ぶのだろうか。儀礼の規模はあきらかに集団の人口規模に関連し、生産物の配分には一定の限界がある。今日、伝統的な宗教儀礼はいっさい廃止されてしまっているから、その範囲を明確にすることはかならずしも容易でない。私達が滞在中に、二三代目のハカファの一人とされるガトンガ氏（Timotheus Ngatonga, Tigoa 部落）がカヌーを新造したときに催した祝宴にもとづいて推測してみることにしよう。

祝宴の当日、そこに招かれ、ヤムイモ、タロイモ、魚の

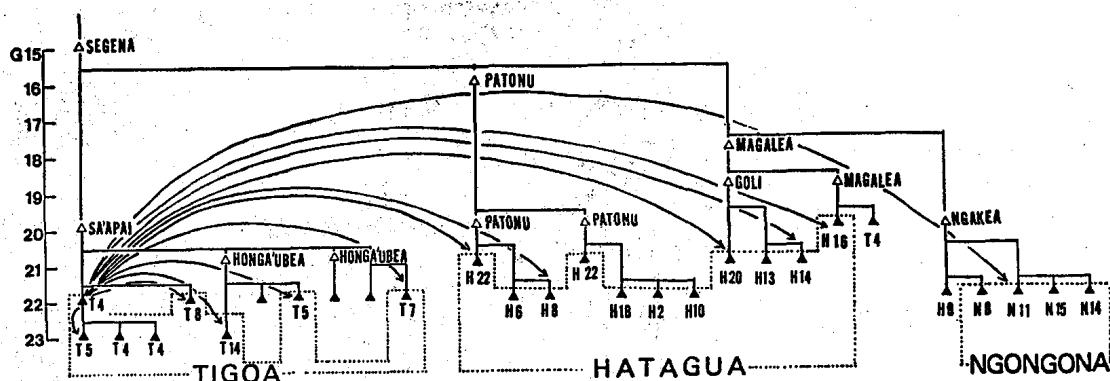


fig. 6. T. Ngatonga 首長 (T.4) の食物配分

蒸し焼きなど、収穫物の配分をうけた人々は、系譜関係で一五世代目から分岐した四つの父系小リネージの三集落一戸の構成員 (Fig. 6)、それに加えて、彼の義理の兄弟や母方の兄弟の親族が、重要な関係として含まれていた。キリスト教化以降、とくに貨幣経済の導入は親族集団の細分化の傾向を強めてきたから、この配分範囲はかつてよりも小さくなっているとみなければならぬだろう。しかし、それが父系の系譜をこえて、妻方、母方のリネージにまでひろがっていることは見のがせない。結婚によって女性は夫のリネージに婚

出 (夫方居住) し、強い父系原理によって支配される。しかし、一方で父系リネージが母系、妻方リネージとのつながりを維持し、いくつかのリネージの連帯によって、協同集団をつくっていることも事実である。

レンネルの人々は父の母方系譜の構成員をタウ・ペンゲア *tau pengea* と呼び、父系系譜の幹からみついている蔓の関係と形容する。それは互に食物の交換をおこなう間柄であるとしている。儀礼に際しておこなわれる収穫物の配分も父系の系譜原理だけではなく、妻方、母方集団との連帯をも含めた実際の協力集団の中でおこなわれていたと考えられるのである。その協力集団の構成員は、耕作だけではなく、漁撈や狩猟などの生産活動カヌーや家屋の建造などに密接な協同をする。おそらく、リネージ間の戦争にも協力関係をもっていたであろう。

こうしてみると、地域神の祭祀に際して生産物を供物すなわち、イナティとして集積し、首長がこれを配分することとはそれが実質的な経済的行為の一貫としてなされていたと考えなければならぬ。農作物は獲得予測のたてにくい漁撈の成果とはちがって、基本的にはそれを必要とする人口と土地と作物品種との間で充分に成果を予測することができるものである。そうしたパーセプションにもとずいて、収穫物が集団内の所定の範囲に配分される。配分によ



a



b

Pl.4. ヤムイモを収穫して配分する

(小片丘彦撮影)

って協同集団の構成員の収入に平均化がはかられるのである。生産物の配分による平均化の傾向は、またこの島で窮乏の可能性が高かったことを暗示するものかもしれない。きびしいサンゴ礁の環境の中で、お互いに分け与えることが、最少の努力によって安定を得る手段であったことはまちがいないのである。

このような収入の平均化は、生産物の流通によっておこなわれただけではなく、構成員を集団から集団へ移動させ

く、長い間には各リネージ集団の可耕地に対する人口の割合は、人口の変動と土地の生産力の変化によって、ある時は大きくなりすぎたり、小さくなりすぎたりすることがおこる。養取の慣行は、各リネージにおける人口圧の不均衡を解消させ、土地保有の平均化をはかることになった。それはまた人口の増加を制限しながら、つまり子供をもうけずに農地を維持する手段でもあったわけである。儀礼に際しておこなわれる収穫物の配分や、養取の慣行は、一定の

ることによっても企てられた。それが、レンネルの社会において、ひんぱんにおこなわれる養取の風習である。父のある子供の養取(タマ・トゥク tama tuku)、結婚関係によらない子供の養取(タマ・プシ tama pusi)もともに、さきあげた儀礼的交換をおこなうリネージ間で、ごく一般的におこなわれる。養取された男子はほとんどの場合、養取先で土地の保有権をうる。父系の単系的系譜によって、厳格に土地を継承していくと、それを継承すべき男子が生れない場合があっただけではな

社会集団の範囲の内部で、生産と消費の恒常性を維持するメカニズムとして作用していたのである。

すでにのべたように、地域神の儀礼は小氏族（カカイアング）を単位として成立したものであったが、人口の増大にともなうリネージ（ハノハノ）の分岐はその儀礼集団も分割していった。つまり地域神の儀礼集団は、分裂することによって、実質的な経済機能を果してきたのである。それは、あらゆる資源がレンネルの島内に、比較的均質に分散し生産の対象と開発技術に地域的な差が少なかったためであろう。

これに対して、天の神の儀礼はどのような社会的機能をもっていたのだろうか。祭祀場（ガグエンガ）が時の経過とともに分岐してきたにもかかわらず、天の神の儀礼がつねにカイトゥ氏族（*sai'a Kaitu'u*）の精神的統合の方向に働いたことは注目すべきである。天の神の儀礼に際して祭祀場でかならず、となえられる詠唱歌（チャント）テペセ・ア・カイトゥ（*tepepe a Kaitu'u*, 一九七四年二月二六日カアグア部落のトガカ *Togaka* から採集）は創始祖先カイトゥから幾世代にわたる系譜を語り、すべてのリネージ（ハノハノ）の人々が、血を分けあったひとつの仲間であることを強調している。

各地の首長（ハカファ）の間に、地位の上下関係を示め

うちなる環境

すものは何もないが、この天の神の儀礼においては、古いリネージの首長が一層、重要な役割をもっていた。その意味で創始祖先カイトゥの直系にあたるテンガノの首長がマガウベアの祭祀場でおこなう天の神の儀礼が、最も神聖で重要な役割を与えられてきたと考えられるのである。（近森一九八五）

天の神の儀礼は、地域神のそれに比べて、経済的領域との関連が薄い。むしろ氏族維持の機能にその意義があったのではないだろうか。天の神に奉納される供物アングトヌも、すでにのべたように海の彼方から寄せくるもの、大きなもの、予測のつきにくいものなど、神秘性のただようものがその中心であって、神聖さは地域神の供物イナティよりもはるかに強い。それは経済的、分配的機能をもつよりは象徴的品格の強いものであった。分裂化の傾向をもつリネージ集団は、一方において天の神の儀礼を通して、つねにカイトゥ氏族への求心性あるいは統合性を維持したのである。

ところで、キリスト教が定着するまで、小氏族（カカイアング）間やリネージ（ハノハノ）の間で戦争が絶えなかったことは、彼らの語る伝承の中に無数にあらわれる。実際、ひんぱんな戦争はレンネルの文化を特徴づけるもののひとつであったといってもよい。レンネルの物質文化を記

載したビルケット・スミスは戦闘用の棍棒などの武器が、これほど多様に発達したところは、おそらく他のポリネシア地域にはないだろうと言っている。(Birker-Smith 1956: 187) その原因の多くは、耕地の不足による土地の争いであった。移動耕作にもとづく社会での人口増加は、つねに可耕地の拡大を必要とする。休閑期間の短縮による集約化が一定の限界を超えた場合に、耕作地をひろげようとすれば集団相互の競争はさけられない。戦いによって親族集団のすべての男子構成員が殺された場合に、その土地が敵の集団の手に渡ることになったのだという。戦争がリネージ内に発生した不安定状態を解決するひとつの手段として機能したことはたしかである。結果として、集団間に土地の再配分がもたらされ、戦いによる大量の死亡者がであれば、局地的な人口圧を解消することにもなった。首長(ハカフア)は戦闘においてリネージの構成員を指揮し、和解した場合は敵対リネージのハカフアに贈物をし、勝戦した場合には敵の土地を自分のリネージの所有にくり入れて構成員に分配するなど、軍事的政治的なつとめを果した。

伝承によれば、戦争に勝って敵の土地をとりあげた場合、敵のリネージの地域神も自分の地域神の中に入り入れていったらしい。敵の地域神を鄭重に祀らなければ、いかに恐しい神の怒りにふれるか、人々は承知していたのだら

う。その結果、リネージごとに地域神の組み合わせに、きわめて複雑な出入りが生じることになったのである。もっとも、滅亡したリネージの神々が、いわゆる「祀らない神」アパイ(ʻapai)となつて、社会秩序を混乱させるという伝承も少くない⁽⁵⁾。

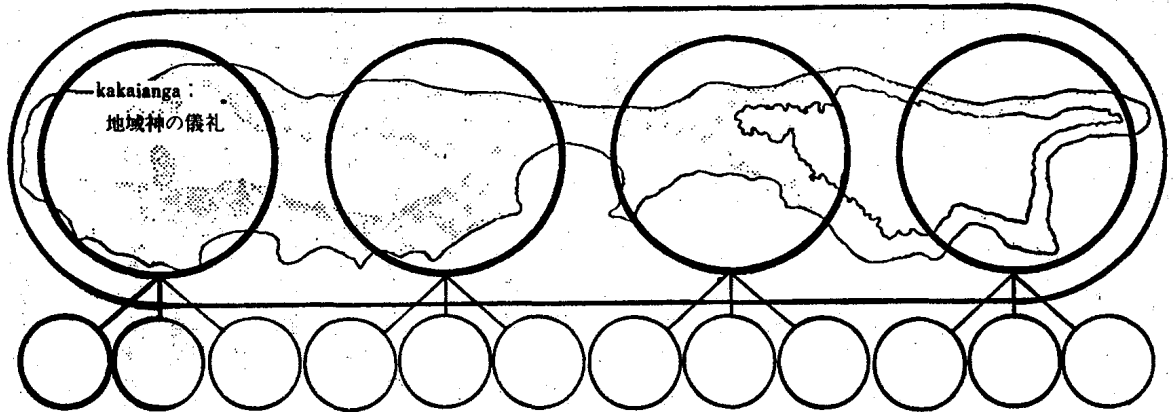
それはとにかく、戦争の終結にはつねに共同体の宗教センターであるガゲンガにおいて、天の神の儀礼が開催されなければならなかった。天の神の儀礼は、リネージよりも高次な社会レベルにおいて、安定化をもたらすメカニズムをもっていたといえるのである。

地域神の儀礼を通しておこなわれる平均化の傾向は、養取の風習とともに、通常はリネージ内部の人口と土地と資源の間の平衡を維持する負のフィードバックとして作用してきた。しかし、その平衡が早魃などの自然災害や環境退化あるいは人口増大によって破綻したとき、リネージ内部のフィードバック機構は正に作用し、他のリネージとの間に土地をめぐる戦争をひき起した。戦争の結果はリネージ間に生産と消費の平均化をもたらすことになる。こうして経済的には、平均的で自律的なリネージ集団が、島内に併立することになったが⁽⁶⁾、その一方で、氏族サアア・カイトウの統合が維持されてきたのは、天の神の祭祀を通じて強調される氏族の意識であった。それがこの小さな島の中

fig7. 儀礼と集団のレベル

sa'a : 天の神の儀礼(カイトウ氏族への統合化)

う
ち
な
る
環
境



hanohano : 地域神の儀礼(小リネージへの分裂化)

で、諸集団の分裂を回避し、戦争をくりかえしながらも調和を保つ作用をはたしてきたのである。隔絶した大海の中で、人々がこの島でしか生存できないことをよく承知していたからにちがいない。創始祖先カイトウにさかのぼる、同じ氏族の一員としての意識、それはとりもなおさず「人間」(タンガ tanga)としての自覚であった。カカイアングがあるいはリネージの自律的な傾向と、氏族(サアア)に対する依存的傾向、両者の調和がこの島での長期にわたる人々の生存を可能にした

のである。(Fig.7)

むすび

レンネルは大海に孤立した貧しい隆起環礁の島である。その環境に人々は二千年の歴史を刻み、心豊かな世界を築き上げた。

ところで、環境とは主体と外界との間の相対的な概念であって、単なる客観的事実ではない。それはその場所に住む人々の認識の仕方を通してしか存在しないのである。島の人々は外界のすべてに自からの言葉で呼びかけ、それらを彼らの文脈にそって再構成した。それによって彼らは独自の適応行動を選択してきたのである。

毎日の雲や風、海岸の地形、植物や土壌、あらゆるものを彼らは微細に観察している。そこに独自の科学が生まれ、農耕や漁撈の技術が発達した。それらの言葉を学び、技術を習得することは、この島に生存するために欠くことのできない手段であった。

その対象は、現実に目に見える環境だけではない。目には見えない環境、つまり、ものとしては認識できない、高度に抽象的な分野もまた重要な環境のひとつであった。それが超自然的な環境である。この領域は技術による人間の一方的な働きかけだけでは成功しない。人間のコントロー

ルが充分におよばないからである。そこで儀礼的手段が求められた。

もとより、環境の質が両者を整然と分割するわけではない。技術と儀礼領域との境界は、相互に融合して移り変っている。ヒティの世界は、まさにそこを埋め合せているのである。ヒティはつねに島とその周辺、つまり島の人々が生計活動の場を求めるところに出現し、島民に科学的知識や技術を伝授する。ある時は軽い儀礼をともなつて、ヒティと島民との交流がすすめられてきた。

タブーもまたそうである。島民は環境のすぐれた開拓者であったが、予断を許さない資源の枯渇には、技術の領域をこえる場合が少くなかった。宗教儀礼やタブーは特定の種を乱獲から保護し、環境保全のシステムを開発したのである。老人だけが食べることを許されたアヒンガメア(ニザダイの一種)や首長の葬儀の時にしか捕獲しなかつた黒いポンゴ(ニザダイの一種)、海亀やシャコガイ、鳩やトキなどに対するいくつもの制限的、排他的な規範。それらの規範を破ったことによる身体的・精神的異常は、みな超自然との関係で説明された。

儀礼というのは自然的、心理的、社会的諸条件について、参加者に情報を伝える表現的行為にはかならない。(Rapport 1971) 超自然的な力の干渉が、島の生態系のなかで

人口と資源との間にある機能的関係を調整し、適応のための規範を用意した。つまり見えない環境が儀礼を介して社会活動を整備し、見える環境へのたくみな適応をもたらしたのである。

見えない環境は、また、人々に途方もない進化的時間と、人間存在(タンガ)の自覚を与えた。マウティキティキによって海中から釣り上げられ、ヒティによってとのえられたこの島に、「われわれ人間」は東方の波濤の彼方から移り住んだ。「われわれ人間」は後から来たものとして、この島で慎み深く生きなければならぬことを知らなければならぬのである。

あの人なつっこい、そして精悍な島の人々の脳裏に展開する多彩な超自然的世界に、私はただ圧倒されるばかりである。人間と自然とのかかわりは物質的なものだけではない。本来、宗教的あるいは倫理的なものではなかつたか。それが失なわれようとした時、島の自然が急速に荒廃しはじめたのを、レンネルの人々はいま、身をもって体験している。(一九八四年十二月稿)

註

(1) 伊藤は *maungī* をポリネシア語の *Maui* に比定している。(伊藤一九七八)

(2) 首長権に関連する *mana* の概念はポリネシアの社会

の特徴であるが、レンネルにおいてはみられなかったようである。mana は単に雷を意味する詩的な表現に残っているだけである。そんなところにもレンネルの首長権の跛行性が指摘できるだろう。

(3) 首長はタウクカ taukuka あるいは、ハカサバ hakasapa と呼ばれる文様の入墨を胸に施し、聖なるマットやコウモリの齒でつくった首飾り、特別な木枕を所有する。キリスト教化以前には、半円形の屋根をもった住居ハンゲ・ハカファに住んでいた。

(4) 土地は父系リネージの男子構成員によって所有され、基本的には父から息子に継承される。もし男子が生れなければ兄弟の息子に継承される。(養取のケースも多い。) 原則的に、女性には土地の保有権がない。土地を継承すべき息子がまだ成人に達しない時に父親が死亡した場合、妻が一時的にその土地を保有することがあるだけである。

(5) レンネルには神に滅された集団の伝承がいくつもある。一九七四年二月五日、タファア老人 (Gordon Tahua) から採集した次の伝承は Tapu 氏族 (Sata Tapu) 滅亡の伝承である。——テンガノ湖テアバ Teaba の近くにあるサガギゴ r Sagangigogo 島の洞穴には、Tapu 氏族の首長ハカファであったタガケイナ Tagakeina が住んでいた。彼は頭から光を発していた。彼は一族をひきいてカイトウ氏族と争い、シキギモエモエ Sikigimoemoe 神によって喰われてしまった。それで Tapu 氏族は滅亡した。サガギゴ島には今でも、その

うちなる環境

人骨が沢山散ばっている。——

(6) 今日、一二のハカノホンガ (父系リネージをたどってさかのぼることのできる最も古いマナハ。リネージの発祥地と考えられている。) の首長ハカファが強いリーダーシップをもっている。しかし、それらの間に最高首長というようなタイトルはみられない。一二のハカノホンガは以下の通りである。

- | | | | |
|----|-----------------------|----|-----------------------|
| 1 | ニテニ Nireni | 2 | ヌクポサア Nukuposaa |
| 3 | カグア Kaagua | 4 | セゲナ Segena |
| 5 | カアバ Kanaba | 6 | テアバマグ Teabamagu |
| 7 | マタンギ Matangi | 8 | バイトップ Batupu |
| 9 | ルグ Lughu | 10 | ニウパニ Niupani (Baigan) |
| 11 | テバイタテ Tebaitahe | | |
| 12 | テガノ Tenganu (Tesauna) | | |

(7) 養取慣行について七つの集落でおこなった調査結果は次の通りである。

集落	例数	男女の内訳
Ngongona	18	男子 11 女子 7
Hatagua	6	5 1
Tahanuku	6	4 2
Kaagua	3	2 1
Tigoa	14	8 6
Tebaitahe	4	2 2
Hutuna	6	4 2

七七 (七七)

合計五七例。うち男子三六例、女子二一例で男子が養取される傾向が強いことがうかがえる。養取先は母方リネージあるいは、父の年長の姉の婚出先のリネージが顕著である。養育 (fosterage) のケースも少なくないが、これを養取と区別することはむづかしい。レンネル語でもこれを区別する用語はない。養育として始まったものも、男子の場合には土地の継承によって養取に変る場合が普通である。

文献

Birket-Smith, Kaj (1956) "An Ethnological Sketch of Rennell Island, A Polynesian Outlier in Melanesia" *Historisk-flogiske Meddelelser*, bind 35, nr. 3 København

近森 正 (一九七五) 「レンネル島の住居—現在と過去—」『都市住宅』No. 95

近森 正 (一九七九) 「ソロモン諸島レンネル島における住居形式の急速な変容」『ガラスライフ』No. 113

近森 正 (一九八二a) 「休閒地のなかの二つの時間—レンネル島における農耕活動—」『史学』Vol. 52 No. 2

近森 正 (一九八二b) 「レンネル島における文化適応の考古学的過程」『稲・舟・祭—松本信広先生追悼論文集—』六興出版・東京

近森 正 (一九八四) 「住居の変化—オセアニア—」『日本のすまいの源流—日本基層文化の探究—』文化出版局・東京
Elbert, S. H. (1992) "Phonemic expansion in Rennel-

lese" *Journal of Polynesian Society* 71 (1) 25-31

Elbert, S. et al. (1965) "From the two Canoes" University of Hawaii Press, in cooperation with the Danish National Museum. Honolulu

伊藤清司 (一九七八) 「レンネル島の説話と他界観」慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報 No. 3

MacGregor, G. (1943) "The Gods of Rennell Island" *Peabody Museum American Archaeology and Ethnology Papers* 20: 32-37

瀬良重夫 (一九七九) 「ソロモン諸島レンネル島における人口とトナンについて」慶応大学文学部民族学・考古学研究室小報 No. 4